

地域住文化を支える諸条件

(5) 下町生活と住宅について

株 ディーワーク代表 藤 津 沢 裕

西洋の都市の多くは、公共の場と私空間が区分されて成立している。ハードな空間の仕切りが都市の特徴とされ、公私の区画は明快である。日本の都市計画も、この区分区画の考え方を基本にしているため、西洋的な空間構成が都市の骨格を形成しつつある。

しかし、戦前から更新の進まない既成市街地（例えば、東京の下町地域）では、公私の区分が不明瞭な土地利用が見られ、曖昧な空間の仕切りや公私の重ね合せ利用が、いまだに地域の生活スタイルを形づくっている。こうした地域では、近代化と伝統文化の両極の中での多様な暮らし方がみられ、これから都市を考える上での様々な問題提起をかいざんすることができる。

1. 荒川区の生活を概観する

荒川区は都心5区とも7区ともいえるほど都心に近い区でありながら、「都心」とか「都会」のイメージがない印象が強い。千葉県や埼玉県に住む〇〇都民を運ぶ千代田・常磐線や日比谷線が、荒川区内を横断しているが、そんな日々の民族大移動を感じさせない「静寂感」が区内にはある。こうした地域での生活を通して感じる下町的な光景・事象を幾つか指摘してみる。

◆銭湯

- ・新築の場合、フロント式が多い。脱衣を見られないため、若い客が増える。但し、昔ながらの番台式の主からすれば「お客様を見とどける責任がある。客に背を向けては商売できない」の声も多い

- ・イスは男湯だけ、女湯はマットが多い
- ・洗い場で歯を磨く人、洗濯する人がいる
- ・藤のカゴやベビーベッドが減っている

- 経営者は北陸出身者が多い。九谷焼の絵付きタイルの壁画はみごとである
- 風呂屋の子供は頭が良くなるらしい、何故か一日中働く親の姿をみて、「継ぎたくない」と思い、よく勉強するとのこと
- 荒川区の銭湯の数は84軒、密度では日本一らしい
- 銭湯の湯の種類は約22種類ある。変わったところでは、疲労回復湯、座風呂、低周波風呂、打たせ湯、鉱泉風呂、激熱湯、電気湯、回転風呂、薬草湯、ジュビナバス等である

◆駄菓子屋

- 経営としては成立しないのに続けている、何故か／働くことが好きである、体を動かしていたい、との説／老人ホームに行くことを思うと、駄菓子屋をやっているほうがよいとの説、例えば個人経営の老人ホームと考えれば納得できる（仮に年間50万円の赤字が出たとしても老人ホームに入るよりも安いし、何より自立的だ）
- ただ子供が昔のようにはかわいくない、とのこと（万引きを指摘しても、パパアと捨てぜりふをはかれたりするのが嫌だという）

- 店は年々減少している（建て替え・立体化）
- 駄菓子屋的施設としても、もんじや焼きの店がある／女子供の溜まり場（安い、着飾ってない）としての伝統があった／男は焼き鳥屋（飲み屋）がこれに当る

- もんじやの店は区内にかなり多い（銭湯の近くには必ずある）

◆お 店

- 駅前地区を除くと、一見の客を対象とする店は少ない／好意的にいふと、会員制のクラブのような心地よさがある（値付けを周辺住民の懷具

- 合で決めている店もある)／転じれば、客との関係が濃いため、煩わしい
- ・常連客が多いため、客が店に与える影響が大きい／プラスでは、長いつきあいが前提となるため、店のレベルが高い／マイナスとして、だから旧来の商売から脱しきれない
 - ・例えば、飲み屋にネクタイ族やグループ客が少ない(中小企業が多いため)／焼き鳥屋の客の多くが単独であり、かつ毎日飲むため、短い時間で黙々と飲んでいる
 - ・例えば、お茶を50グラム単位で買う客がいる
- ◆路地の暮らし
- ・いい意味でも悪い意味でも、暮らすことにしまりのないまちである／ゴミのような家・崩れそうな家がある／下着姿やゴム草履での散歩・買物姿を見る／東南アジア的戸外生活の感じ
 - ・お盆の時期には、イス、縁台が目につくようになる(孫・子が帰ってくるから)／道端でゴザをひいて、トランプやタ涼み、人形遊び、花火などをしている／絵本を読んで聞かせる光景
 - ・道路利用が頻繁である／整理されていない状況／リヤカーハウスがある
 - ・前の道路を<戸外室>のように利用する／ゴザの子供部屋／近所の共通の茶の間(昔の井戸端のようである)／応接・居間的利用(玄関が小さいからか)／洗濯・物干場にもなる(行水もみられる、工事用フェンスを物干代わりにする例もある)／道に住宅機能を代用させている
 - ・夜中、街頭電話で若い人が大声で話している／家が狭いからか、家族人数が多いためか
 - ・領域意識が希薄に思われる／家の内外意識が足りない／親がしていたことをしているだけ、との見方もできる(親子代々、親からの影響、長く棲んでいるから)／道利用をしていても、占有意識がないのでは？
 - ・盛り場には人が少なく住宅地には人がいる／住宅地のいろいろな場所に人がたたずんでいる、話し込んでいる、何か世話をしている／人が生活していることの戸外行為がうかがえる／階段があると、すわるのが自然である
 - ・<人と人、物と物、人と物>との相互関係がある／見る、見られる、匂う、聞こえる／プライ

バシーがあまりない／ふと見上げると2階から見られている／赤の他人が路地を歩くと監視の眼が光る

◆路地のみどり

- ・路地の家をみると、個人的な生活指向の説明ができる／植木鉢に食器の多い家をみると、ああ、この人は物を捨てられないんだなあ、と思う(これが、路地を歩いて感じる妙な安心なのか)
 - ・逆説的にいと、都会であることの絶対的孤独を生きるために、<ただただ緑と一緒にいたい>とする素朴な感情かもしれない
 - ・住民相互の確認・承認の場として、植木鉢が小道具のように使われるのではないか？一旧住民が新住民へ領域侵犯するケースとして次の事例が挙げられる(おせっかいな例ではある)
 - ・ある事例 1)新住民の参入→2)口での挨拶→3)新住民領域への旧住民所有植木鉢の進出→4)口での確認「置いていいですか」→5)植木鉢の固定化→6)第2の植木鉢(徐々に増える)→7)傘や靴などの陳列=侵入行為を気軽にやるようになる→8)領域拡大行為の繰り返し(こうした例は現代感覚の強い若い人ほどに反発や嫌悪感があり、下町文化の非現代性を感じてしまう)
 - ・金をかけずに育てている／緑の繁殖の主役は物々交換である／金を気にせず育てられる
 - ・緑をみるとことは現代生活のポジショニング確認にもなる／例えば、土を自前でつくることで対応している人々がいる。緑の育成上も効果的であり、生ゴミ処理もできるし、バランスのとれた生活ができる(交換時の伝達)
 - ・トロ箱などの廃物利用は、消費至上主義への無意識の抗議として共感できたりする
- 生活スタイルの多様化が定着したとされる今日、下町生活の平均像を浮き上がらせるることは困難な作業である。例えば料理を考える。パリの夕食の献立は、7割までがステーキであると玉村豊男氏が指摘しているが、現在の日本の家庭の献立を予測できるだろうか。多種多様な料理が家庭に入り込み、その素材・調理法は様々であり、下町といえども、生活志向を特定することは難しい。
- 荒川地域は、他と比較して昔からの伝統・文化が残っているといわれる。確かに飲食店の多くは

一見の客が少なく、常連客中心であり、ティクアウトやファミリーレストラン等の新規産業の進出速度は緩やかである。それでも他地区と同様で、生活スタイルは見えにくい。

次項では、路地空間に焦点をしづり、みどりをキーワードにして、下町生活の一端を紹介する。

2. 中間領域を主とする下町空間の特徴について

荒川区の緑被率7.4%は、東京23区中22位という。緑被率が低いのは、おおよそ公的空間（公園や広い道路など）が少ないためであるが、中間領域といわれる部分には、様々な形態、素材のみどりが氾濫している。緑の量はそう多くはない。山の手の高級住宅地（松濤や新百合が丘等）を調査したが、当然ながら緑が多い（密度が低く、空地が多いため比較にはならないが）。しかし、何かが違う。量ではなく、まちのあり方が、あるいは、まち＝空間と人との関わり方の本質が異なるようを感じてしまう。<官>と<民>との境界の在り方が問題となる。権利意識の強い近代都市では、空間の構成や本質までも左右するテーマもある。下町地域の中間領域について、思いついたところを列記してみる。

- 1) 埸などの敷地境界を仕切るハードな囲障が極端に少ないとこと
- 2) 公的空間（特に道路部分）に、私的所有物（特に緑）が大量に置かれていること
- 3) 道路幅員が狭く、しかも、道路境界からほぼ家の壁面が立ち上がっているため、例えば、花台や壁に吊るされた草木と、本当に至近距離で遭遇することになること
- 4) 結果として、それぞれの生活状態が推測できることになる。だから、まちを歩いていて、大きさにいえば、人生の刺激を受けることが多いこと

このことを、普通の地域と比較してみよう。

1)については、ブロック塀が全国的に流行しており、庭や家の中が覗きにくい。2)は高級住宅地などでは禁止されており、減少の傾向にある。3)の空間構成は、荒川などの下町地域に少し見られるのみである（都心の業務地区などはこの構成に近いが、中高層が多く、荒川区のように、戸建て

中心の住宅利用での高密空間の地区は少ない）。4)については、俗にいう下町情緒とか下町人情等を感じさせる本質とも思える部分である。

◆荒川の特徴

<官と民><公と私>との境界が曖昧であり、<私>から<公>への「にじみだし」がしばしば見られる。また、道路が狭く、折れ曲がっていることが、情緒性を増大させる舞台効果となっている。また、「にじみだし」の主要な構成要素である緑の持つ属性が、地域空間を特徴づける極めて重要な働きをしている。

◆山の手（現代的な地域）の特徴

<私>から<公>への「にじみだし」があつて初めて緑の属性は、社会性を持つ。<公>と<私>の境界が明快かつ堅牢な山の手では、庭木などの私的緑がありながら、道行く人や地域に充分には貢献できず、道路空間はもっぱら公的整備による緑が目立つことになる。

◆荒川と現代的地域（仮に山の手）との比較

荒川地域の空間構成の特徴は、区分区画が曖昧な点にある。この原因は、ひとつには都市計画が未熟な時代に市街化の進行が進んだために、公的整備が立ち遅れたことであり、ふたつには建築基準法施行以前の建物が戦災の被害からも免れ、既存不適確として数多く残されていることに起因している、と思われる。

区分区画とは、「線引き」をすることで、空間に秩序や機能性を与えることにある。荒川のまちは、その意味では極めて「無秩序」であり、その無秩序さの中で、例えば路地の緑についていえば、「緑」が媒体となり、中間領域での<緑の利用>が続けられている。区分の曖昧さを良しとする考え方が地域のアイデンティティとしてあり、その象徴として<にじみだしの緑>がある。にじみだした緑が公的空間に存在することで、人と緑との関係に、社会的意味が発生する。個人的生活の姿がにじみ出し緑を通してまちに反映することで、まちに<ある種の秩序>を生み出す。このようなく場の力学>が下町空間を支えており、こうしたシステムを感じるから、荒川のまちが他の現代的地区と異なるように見えるのだと思う。

3. 暮らしの一例

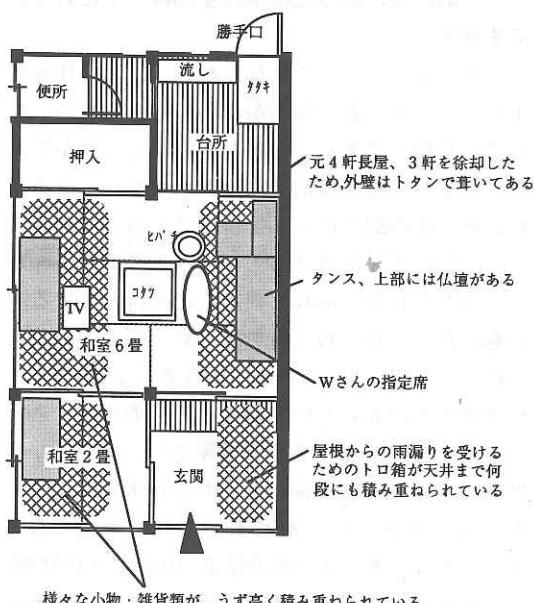
再開発計画を通して生活の一端を知りえた老女W氏（78歳）の例を示そう。

四国から上京、築60年の4軒長屋に住み着いて50年、夫に先立たれ一人暮らしとなって十数年となる。眼と心臓が悪くなるまでは、仕立てで生計を立てていたが、現在は年金のみが収入源、あまりに低い額なので、大家が生活保護申請を勧めるが、本人は強く拒否、20代近く続く本家当主であり、ご先祖に顔向けできないという。ために、生活は極めて質素である。（筆者も大学入学まで一家5人の2K生活であり、やや質素な感覚を知りうるが、時代を考えると比較にならない。）

W氏の住宅は、間口2間に奥行き3間半、室内には50年間の家財道具・小物類が堆積していて、W氏の指定席以外に人が座れる場所がない（間取り図と写真参照）。W氏と接していく眼につく現代文明は、テレビ、ラジオ、Tシャツだけである。例えば、ジュースは飲まない、洗剤は使わない（食器は火鉢の灰で洗う）、冷蔵庫はない、物を捨てない、夏以外は着物に足袋（縫い方・スタイルがすごい）、一人暮らしになってから上京した親戚を除いて人を家に入れたことがない。彼女の社会

W氏の住宅

*上が北方向、間口2間×奥行き3間半



写真一1 左側建物がW氏の住宅

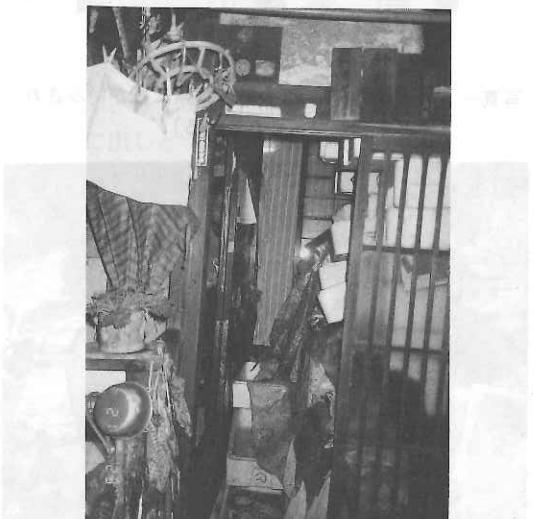


写真一2 右側建物がW氏の住宅



写真一3 玄関方向

(トロ箱が集積している)



写真一四 台所



写真一五 台所から居間方向を見る
(右は筆者)



写真一六 W氏の指定席(火鉢では常に紙がいぶされ、
どてらがかぶされている)



写真一七 居間に積み重ねられた小物類



との接点は、主に郵便局・銀行（経済・金融にあかるい）、新聞・NHK（情報は買うものとの認識を持っている）、銭湯・ゴミ置場（趣味と実益を兼ねて）、区役所（毎年必要ないのに確定申告をしている）、日用品と路地の植木・園芸である。みどりの生活については、取材の整理ができているので以下に示す。取材時期は、長年住み慣れた長屋を出て、アパート住まいになってからのものである。

…………前の家にあった植木は全部持ってこれたんですか？

とんでもないよ、これなんかね、ホンの10分の1くらいだよ。置く場所がないのもあるしね、なんにしろ持って来るのも骨だからねえ。だからあたしはまだ、銭湯は前の家の近くまで行ってるんだけど、その帰りにね、1つか2つ持って帰るようにしている。今日はね、キョウチクトウがきれいだったからね、あれは根っこごと持って来る訳にもいかないからね、枝を折って、その辺の草も一緒にとて、ここに生けてあるでしょ。あのキョウチクトウはね、だいぶ前だけど、おそばやさんがあるでしょ、そうそう大国屋さん、あそこから枝をもらってきて、挿しといいたのが大きくなつちゃったよ。あの辺（前の住まいの近く）にはね、なんだかんだであたしの植えた木がたくさんある

よ。

……土をつくっているって聞いたんですけど？

あんた。そんなの当たり前。だれでもやってることです。最近の人はどうか知らないけどね。このあたりでは土が少ないので加えて、肥えたいい土がないの、そしたらつくるしかないでしょ。私は母親のやってのをみてね、覚えたの。そうだね、私はトウモロコシの葉を良く使うね、この頃は米の飯を食べないで、こればかり食べているよ。この葉を小さく切ってね、底に敷いといて、その上にそこらで集めてきたホコリやゴミをね、そう、チリ取りとホウキで集めてね、それをトウモロコシの葉の上に置いてやるの。

その上にまたトウモロコシの葉を敷いて、それから残飯ね、これも塩抜きして加えてやります。塩抜きはね、水にしばらく漬けといて、ザルに上げて洗い流すんだよ。そしてまた、トウモロコシの葉を敷いて……と繰り返していく。いい土ができるまで半年以上はかかるね。

……それは箱の中でやるんですか？

そう。前の家だと地面があったからじかに地面に作っちゃってもよかったけど、ここだとそうはいかないわね。でも穴を掘って、その上に土をかぶせて寝かせておくのが一番いいんだよ。ただね、その場合には、犬だの猫だのが掘じくり返すからね、上に植木鉢を置くのを忘れないこと。それとね、3尺より深く掘る場合は方位を見なきゃ駄目。ほんとだよ、死人だって出たんだから。

……虫が湧きませんか？

湧く湧く。それはね、タバコを吸うんだよ。タバコの葉で消毒するの。燃えかすでもいいし、まだ吸っていないシケッた奴とかね、巻紙なんかも全部入れる。なんだってね、ビニール以外は土になるんだから、なんだって利用しなくちゃね。でもね、土のなかに虫がいるってことがその土の栄養を語っているんだから、全部殺そうなんて考えちゃ駄目。虫のつく野菜をつくらなくちゃ駄目なんだよ。よその人はたいてい殺虫剤を使うけどね、あたしは絶対使わないよ。だからよその虫が全部家に来るの。けど虫が大切もあるんだよ。それを忘れちゃ駄目。どうしてって、健康に一番よいから植木やってんのに、殺虫剤かぶったらそんな

の、本末転倒っていうんですよ。わかる？ 悪い虫を殺すよりも、いい虫と生きることを考えるね、私は。ミミズなんかは最も大事。

……他に肥料とかは？

この土ができると肥料なんかいらない、こわいものなしだよ。でもなんでも肥料に使う。この鉢のなかにも煮干しだの、カツオ節のだしがらだのが入ってるよ。古くなつてシケッたカツオ節が丸々1本入っているのもあるよ。あたしは残パンは決して捨てない。みんな土に使う。

……日常の手入れは、草取りや水やりとかですか？

あたしは草取りはしない。雑草も必要なんだよ。そりやああまり繁るとよくないから間引きするけど、全部取るようなことは決してしない。そのバランスがね、頭の使いどころなの。植木も、雑草も、虫も、あたしも、みんなが共に生きるって発想が大事。

この頃の人はそんなこと考えないけどね。雑草があるため本体も生きるんです。太陽の光線が強すぎるので柔めたりね、あとね、根っこもあった方がいいんですよ。それに大きくなつて枯れたときのことも考えなくちゃね。雑草の葉は肥やしに、軸（茎）も乾かして支柱にしたり、はしにしたり、なんでも無駄なく使うの。なんだってね、捨てるのは簡単。誰でもできる。一見無駄なものをね、どうやって利用するかが頭の使いどころなんだよ。あたしはそういうのにかけては誰にも負けない自信があるんだ。水も水道の水を直接使うなんてのは愚の骨頂ね。洗い物をした後の水とかをためといて、ううん、洗剤は使わないから、それをひなたに出しといてね。冬はひなた水は絶対だね。

……いつ頃から、どういうきっかけで植木いじりを始めたんですか？

そりや、いくらあたしでも娘の時分からこんなことはやらないよ。60位になってから腰をいためてね、こりやあ気だけ若くても、体はどんどん老いぼれていくなあと気がついて、健康法ではじめたんだよ。植木いじりは健康には一番ですよ。何てったっけね、何とかいう九州の女流作家の先生も、目を悪くしたんだけど畑仕事をしてたっていうんだからね。結局、青いものは酸素を出すか

ら、それが体のためにいいんだろうね。実際あたしは植木いじりをしてると、腰の痛いのを忘れてやるし、体も軽くなるよ。良い運動になるし、ほら、しじゅうあれはこっちに置いたほうがいいや、それはこっちに持ってこようとか移動したりして、痛い部分のいいマッサージにもなるんだろうね。

あんたもね、気が若いのはいくら若くても構わないけどね、体はきっちり歳を取るんだから、腰だけは冷やすんじゃないよ。わかった？

(ヒアリング・構成 真鍋千恵子=ディーワーク)

4. 終わりに

W氏の例は、荒川でも特殊ではある。しかし、3日で景色が変わるといわれる東京において、数十年間変わらぬ暮らしをしている人々がいることも確かであり、W氏はその先達である。W氏20代

の頃の日暮里駅は池袋・渋谷に負けない賑わいがあり、W氏はその至近距離で都会生活を50年以上も暮らしている。当時のモガであり、DINKS生活者でもあった。こうした都市居住の先駆者から何を学んだかを自問する。数世紀を経た建物が都市空間を支えるローマやパリでは、都市生活のノウハウが伝承されるという。この東京に築百年以上の建物が何パーセントあるのだろうか。マンション等集住文化がようやく根付きつつあるように、新しい生活空間に適応していくには時が必要である。そのノウハウやシステムを継承するためには、更に時間を要する。下町生活は日本の都市文化だという。ならば、こうした都市生活の知恵や工夫を大切にする視点を持ちたい。かつ、少しでも都市計画や都市居住の中で活かせるよう努めたい。